

[シンポジウム]

GCI をめぐって ——新 Grice 派と関連性理論の比較——

兎 玉 徳 美

1. はじめに

Grice (1975) の「一般的会話上の推意」(generalized conversational implicature; 以後 GCI と略す) は会話の協調原則や4つの公理を前提にしている。GCI はその後 Horn (1984) や Levinson (2000) などによりさらに具体化されている。本論の第1の目的はコードとしての GCI が語用論においてどのような役割をはたしているかを明らかにすることである。第2に、意味の分析法をめぐって新 Grice 派と関連性理論を比較し、最後に推意を含む意味の分析のあり方について今後の課題を提言する。

2. 分析の枠組み

語用論における推意の分析法として新 Grice 派と関連性理論の2つの理論の異同を A ~ G にわたって考察する。A・B は2つの理論の前提となる用語の比較であり、C 以下は両理論の枠組みの異同を示す分析例である。

A 意味論と語用論

かつて Gazdar (1979:2) は語用論を次のように規定した。

- (1) a. Pragmatics = MEANING — TRUTH CONDITION (Semantics)
- b. The output of semantics is the input of pragmatics.

発話された文の真理条件を扱うのが意味論であり、発話の意味のうち意味論で扱う意味を引いたもの、つまり意味論の作業のあと真理条件で直接説明できない意味を扱うのが語用論であるとした。同時代の Grice (1975, 1989) もほぼ同じように考えている。しかし Levinson (2000:172) は直示 (deixis) 解釈やあいまい性の除去などで意味論情報と語用論情報が相互

に入り乱れて適用されるとし、(1b)に反対し、結果的には(1a)をも否定している。これに対して関連性理論は(1b)については Gazdar と同じ立場であるが、真理条件は語用論情報を無視して規定されないとする点で Levinson と同じ立場であり、(1a)に反対している。

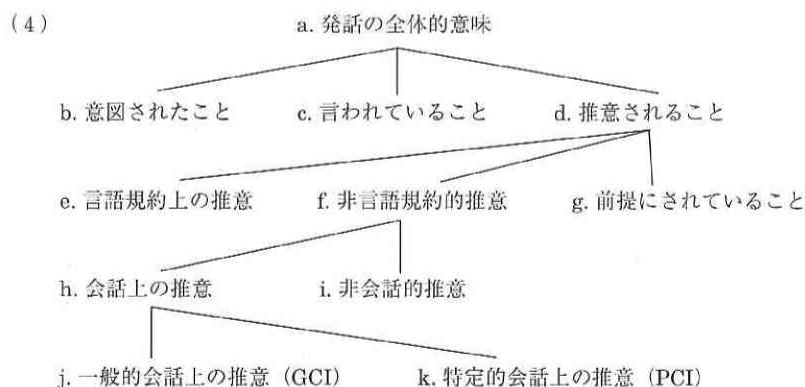
- (2) They [The pragmatic processes] act on the output of linguistic semantics, enriching incomplete logical forms into fully propositional forms which are in turn the bearers of truth conditions. (Sperber and Wilson 1995:258)

Levinson (2000) は意味論と語用論の境界を明示していないが、関連性理論の意味論は Gazdar の真理条件意味論より狭く、語用論は広い。関連性理論では不完全な論理形式を真理値の間える完全な命題形式に還元富化する (enrich) 過程は語用論に属する。

B 言われていること (what is said) ・表意 (explicature) ・推意 (implicature)

一般に「推意」は「言われていること」との対比で用いられる。

- (3) a. what is said = what is directly or literally conveyed
 b. what is implicated = what is suggested, hinted or implied (Hawley 2002)



(Grice 1989)

「言われていること」と「推意」は常識的に(3)のように規定されるが、「直接」伝えられることと示唆・含意されることの区別は必ずしも明確ではない。一連の Grice (1989) の論文によると、発話の全体的意味は(4)のように区別され、新 Grice 派は無標の文脈で好まれる(j)のGCIを中心に会話上の推意を分析している。

言われていること・表意・推意の中味は、Levinson (2000:195) が次の(5)で示してい

るように、理論や人により多様に異なる。関連性理論では発話によって伝達される想定は通例表意と推意の2つに分けられる。表意とは発話によりコード化された論理形式の発展である明示の意味であり、推意は論理形式の発展とみなされない非明示の意味である。この表意は(2)において「不完全な論理形式を完全な命題形式に富化する」語用論上の過程を含み、Grice や新 Grice 派の「言われていること」だけでなく推意をも一部含んでいる。

(5)

<i>Author</i>	<i>Semantic Representation</i>	<i>Deictic & reference resolution</i>	<i>Minimal proposition</i>	<i>Enriched proposition</i>	<i>Additional propositions</i>
Grice 1989	"What is said"			"Implicature"	
Sperber & Wilson 1986	"Semantics"	"Explicature"			"Implicature"
Carston 1988	"Semantics"	"Explicature"			"Implicature"
	"What is said"				
Recanati 1989	"What is said"				
	"Sentence meaning"	"Explicature"			
Levinson 1988	"What is said"				
	"The coded"	"Implicature"			
Bach 1994	"What is said"		"Implicature"		"Implicature"

関連性理論の表意と推意、および富化の具体例をみてみよう。

- (6) a. It's cold.
 b. It will be cold tonight.
 c. Can't you close the window?
- (7) a. He handed her the scalpel. [A SECOND OR TWO LATER] She made the incision [WITH THAT SCALPEL].
 b. The car is too expensive [FOR ME TO BUY].
 c. I have had lunch [TODAY].
- (Sequeriros 2002)

(6a) の発話を聞いて想定される (6b) は (6a) の述語動詞の論理的発展であり、明示的な表意の問題として扱われるが、(6c) の想定は (6a) の論理的発展でなく、非明示的な推意とみなされる。(7) の場合、大文字部分は完全な命題形式に富化されたもので、表意の一部とみなされる。

(新) Grice 派における推意の範囲は広く、関連性理論で表意とされる (7) の大文字部分は推意とみなされる。Grice (1989:86) は推意を次のように規定している。

- (8) What is implicated is what it is required that one assume a speaker to think in order to preserve the assumption that he is observing the Cooperative Principle (and perhaps some conversational maxims as well).

Griceにとって推意は会話の協調原則や公理が守られていることを前提に想定されている。Levinson (1988, 2000) も同じ前提に立っているが、その推意は Grice の「言われていること」の一部も含んでおり、Grice の推意より広い。

他方、関連性理論での推意は限定されたものである。

- (9) An implicature is a contextual assumption or implication which a speaker, intending her utterance to be manifestly relevant, manifestly intended to make manifest to the hearer. We will distinguish two kinds of implicatures: *implicated premises* and *implicated conclusions*.... All implicatures, we claim, fall into one or the other of these categories.

(Sperber and Wilson 1986:194)

- (10) a. Peter: Would you drive a Mercedes? Mary: I wouldn't drive ANY expensive car.
b. A Mercedes is an expensive car.
c. Mary wouldn't drive a Mercedes.

(Sperber and Wilson 1986:194)

推意は、(9) が示すように、話し手が聞き手に顕在化させようとはっきり意図した文脈上の想定あるいは含意であり、前提推意と結論推意のいずれかである。つまり三段論法での小前提や結論を推意と呼んでいる。例えば (10a) で Peter の問いに Mary のように答えたとすれば、Peter は Mary の答えを大前提に (10b) を小前提、(10c) を結論として推論し、Mary の意図を理解する。(10a) の対話では (10b,c) が推意として扱われる。

C コードモデルか推論モデルか

言語理論の枠組みは、本来、言語がどのような組織体であるかを提示するものである。言語についておよそ次の3種の枠組みが想定される。

- (11) a. 意味論や語用論が対象とする文にも発話にもコードはない。
b. コードは文にあるが、発話にはない。
c. コードは文にも発話にもある。

(11a) には言語に厳密な体系が存在することを否定し、「語の意味は用法である」とした Wittgenstein などが属する。従来の語用論や (新) Grice 派は (11c) に属し、関連性理論は

(11b) の立場である。

(11b,c) では次例の説明が違ってくる。

(12) John likes *flying kites*.

(13) A1 : She always cleans the refrigerator very well.

A2 : Can I have milk for my coffee?

B : There's milk in the refrigerator.

C1 : that should have been cleaned up

C2 : that would be suitable for putting in your coffee

(Berg 2002)

(12) のイタリック体部分のあいまいさ (kites which are flying か to fly kite か) について (11b,c) はともに文法規則によって説明する。(11b,c) の違いは (13) に現れる。(13) は A と B の対話である。A1、A2 のいずれを受けて B を発したかにより B の意味はそれぞれ C1、C2 を続けて発した意味となる。B の意味解釈が文脈に応じて異なることはだれもが一致する。問題はそこで働く推論の扱いである。(11b,c) は発話による伝達行為に対して異なる見解をもっている。

(14) The two approaches [i.e. the code model and the inferential account of communication] starts from radically different assumption about the nature of communication itself.

(Wilson and Sperber 1986)

(新) Grice にとっては会話の協調原則や 4 つの公理あるいは GCI が発話で働き、推論過程のコードを構成するのに対して、推論モデルを提唱する関連性理論は次の関連性条件を推論過程の基礎とし、他のコードを設定するわけではない。

(15) a. 程度条件 1 : 想定は文脈中での文脈効果が大きいほど関連性が高い。

b. 程度条件 2 : 想定は文脈中でのその処理に要する労力が小さいほど関連性が高い。

(Sperber and Wilson 1986:125)

D 分析対象とする意味：3 レベルの意味か 2 レベルの意味か

先ほど C で述べた (新) Grice 派と関連性理論の違いは分析対象とする意味の違いに由来する。

(16) a. 記号がもつ語彙文法上の意味

b. 発話トークンとしての意味 (PCI)

c. 発話タイプとしての意味 (GCI)

- (17) This third layer is a level of systematic pragmatic inference based not on direct computations about how language is normally used. These expectations give rise to presumptions, default inferences, about both content and force; and it is at this level (if not all) that we can sensibly talk about speech acts, presuppositions,...and of special concern to us, generalized conversational implicatures. (Levinson 2000:22)

新 Grice 派が (16a-c) を、関連性理論が (16a,b) を対象とする。したがって (17) が述べているように、新 Grice 派が無標の、または通常の文脈で好まれる推論過程での解釈 (GCI) を対象とするのに対して、関連性理論はすべての文脈情報を同じレベルの文脈含意 (contextual implication) として扱い、デフォルト推論を認めない。次例を参照されたい。

- (18) a. The noise of the gun frightened off the birds.
 b. The birds flew away.<デフォルト推論: If x is a bird, x can/will fly.
 c. The birds swam away. In fact, they were swans.
 d. The birds stumbled away. In fact, their wings were broken. (Levinson 2000:45)

新 Grice 派はデフォルト推論に基づいて (18b) を GCI として解釈する。しかし現実には状況によって (18c, d) の解釈 (PCI) もありうる。しかしこれは GCI と異なるため、その発話に In fact が用いられることになる。他方、関連性理論では (18b, c, d) の動詞は想定される文脈含意から選ばれたものであり、同じレベル (PCI) に属する。そのため (18b) のデフォルト推論が想定されず、(18c,d) の In fact がなぜ用いられるかを説明できない。

(16c) の発話タイプの意味を認めるべきか否かの議論は、真理値として2値論理を主張する Russell (1905) と真でも偽でもない命題を認める3値論理を展開する Strawson (1950) の違いに遡る。

- (19) a. The king of France is bald.
 b.i) There is a king of France.
 ii) There is only one king of France.
 iii) This individual is bald.

Russell によると、(19a) と断言の連言 (conjunction) をなす (19bi, ii, iii) は同じ現実を表し、(19bi, ii, iii) はすべて (19a) に含意され、3つの命題のうち1つでも偽であれば (19a) は偽となる。これに対して、Strawson は「フランスに国王がいる」という前提に立

ってはじめて「彼は禿げている」の当否を論じることができるとして、(19a) は (19bi) を前提にしていると主張した。前提が偽の場合、(19a) は意味をもつが、真か偽かは決定できないことになる (詳しくは兎玉 2001 参照)。ここでの前提や 3 値論理は発話タイプの意味であり、デフォルト推論とも関連する。

E 具体的な分析例：GCI が富化か

新 Grice 派は GCI として次の 3 種を設定している。

- (20) a. Q 推意 (Q + >) = 量の公理 (1) [必要なだけの情報を与えよ] と関連：言われてないことはわからない→尺度をもつ表現に適用され、下限を断定し意味の拡大を含めて上限の推意をうながす。
- b. I 推意 (または R 推意) (I + >) = 量の公理 (2) [必要以上の情報を与えるな] ・関係の公理 (・様態の公理) と関連：簡単に言われていることはステレオタイプを通して具体化される→意味の特殊化に適用され、適用範囲の上限を断定し具体的な解釈を進めるため下限の推意をうながす。
- c. M 推意 (M + >) = 様態の公理と関連：普通でない形で表現されていることは普通でない。

(Levinson 1987, 2000; Horn 1984)

(20b) を Levinson は I 推意、Horn は R 推意と呼んでいる (呼称の違いについては後述の § 3 参照)。ここでは Levinson に従う。また (20c) は Levinson のみが設定し、Horn は (20b) の R 推意に含めている。

- (21) a. 数量または程度を表す対の要素 < A, B > において A > B という尺度が想定される場合、もし B ならば A でない (~A)。
b. < 4, 3 >, < all, some >, < hot, warm >, < ecstatic, happy >
- (22) a. John ate three carrots.
b. Asserts: John at least three carrots.
c. Q + > John ate at most three carrots.
d. He ate three carrots---in fact he ate four/ * none.
e. He ate three carrots, if not four/ * two.
- (23) a. This soup is warm — in fact hot / * tepid.
b. I'm happy — indeed, I'm ecstatic / * unhappy.
c. It's possible if not certain. vs * It's certain if not possible.

(24) a. Can you pass me the salt ?

I + > I ask you to pass me the salt.

b. John turned the key and the engine started.

I + > John turned the key and then the engine started.

c. John unpacked the picnic. The beer was warm. /^{*} The book was heavy.

I + > The beer was part of the picnic.

d. Sue walked into the room. The chandelier was magnificent. [I + > The room had a chandelier.] ? It was in the cupboard. (Horn 1984; Levinson 2000)

(25) a. It's possible the plane will be late.

I + > 'likely to stereotypical probability *n*'

b. It's not impossible that the plane will be late.

M + > 'rather less likely than *n*'

(21a) は Q 推意をやや厳密に規定したものである。尺度に基づく Q 推意は (21b) にみられるように、数量詞だけでなく程度表現にも適用される。(22) (23) での (不) 適格性の違いは、(20a) で示したように、断定したもの (下限) は取り消しできないが、推意さるもの (上限) は取り消し可能なことによる。(24c,d) の (不) 適格性の違いは I 推意により具体化される解釈 (上限) を守るか、それに違反するかによる。(25a,b) は I 推意と M 推意の含意の違いを示した例である。以後、新 Grice 派については Q 推意と I 推意のみを扱う。

Q 推意と I 推意は相反する方向に働いているが、これは人間の言動が Zipf (1949:21) のいう「最小労力の原則」に従い、儉約を旨としているためである。

(26) Zipf's principle of least effort

If there are an *m* number of different distinctive meanings to be verbalized, there will be (1) a *speaker's economy* in possessing a vocabulary of one word which will refer to all the *m* distinctive meanings; and there will also be (2) an opposing *auditor's economy* in possessing a vocabulary of *m* different words with *one* distinctive meaning for each word.

最小労力の原則はコミュニケーションにおいて話し手と聞き手の側で反対に作用し、Q 推意に聞き手の論理が、そして I 推意に話し手の論理が働いている。

Q 推意と I 推意はさらに拡大解釈されて「不定冠詞 + 名詞」表現にも適用される。

(27) a. I met a woman at my office.

Q + > She wasn't the speaker's wife [my mother, sister, etc.].

b. I met a woman at my office, but she was my wife.

c. I went into a house. / I slept in a car yesterday. / Mort and David took a shower (separate showers). (Horn 1984)

(28) a. I broke a finger yesterday.

I + > The finger was the speaker's.

b. I broke a finger yesterday, but it wasn't one of mine.

c. I lost a book yesterday. / I went out with a camera. / Mort and David bought a piano (together). (Horn 1984)

(27)(28) の (b) で but が用いられているが、(a) を聞いた段階でそれぞれ Q 推意、I 推意が働き、but 以下でその推意を取り消している。(c) はそれぞれの類例である。

関連性理論はコードとしての Q 推意や I 推意を設定しない。その代わり新 Grice 派が推意と呼ぶものの一部は表意の解釈過程である富化によって説明される (詳しくは Carston (Forthcoming); 武内 2002 参照)。

(29) a. あいまい性の除去 (disambiguation) = 文脈により特定化される概念: C の (12)

b. 意味充足 (saturation) = 文脈により指示関係の付与を施したり、省略されている語を復元: B の (7a)

c. 自由富化 (free enrichment) = 文脈の指図がなく付加可能な概念: B の (7c)

d. アドホック概念構築 (ad hoc concept construction) = 文脈によりアドホックに決まる概念: B の (7b)

Sperber and Wilson (1986) は (29a-c) の 3 種を認めていたが、Carston (Forthcoming) は (29d) を追加している。富化は文脈により付加される意味に違いがあることを示しており、その限りでの意義はある。しかし (29a-d) は確定される意味の分類であり、無標の文脈でなぜそうなるかを示すコードではない。

F (不) 適格性の判断は可能か否か

Q 推意や I 推意は一種のコードであり、E の (21) - (24) の (不) 適格性や E の (27b) (28b) で推意の取り消しが可能であることを説明する。しかし富化は関連性を基礎にしているが、本来、関連性・文脈効果・処理労力は程度の問題で計測不可能であり、コードとして (不) 適格性や取り消し可能性を説明することはできない。さらに次例などの説明も不可能である。

- (30) A : Won't you come to my birthday party tonight?
 B1 : No, I won't.
 B2 : I have an examination tomorrow.

(30) では A に個人的見解を聞かれて B1 は直接答え、B2 は間接的に答えている。B の情報としては B1 の主観的情報のほうが B 2 の客観的情報より大きな価値をもつはずであるが、実際の日常会話では B1 より B2 のように答えるほうが普通である。ここでは主観的情報、客観的情報の尺度が存在し（用例 (20a) 参照）、間接的な客観的情報を提供することによって暗に主観的情報がないことを示している（山本 2002:42 参照）。つまり相手の期待に添わないときの間接的応答表現は関連性理論のいう文脈効果や処理労力によって説明されるのではなく、相手との衝突を避けて対人関係を滑らかにしようとする「エチケット」が働き、そこでは控えめ表現として尺度の推意が利用されている。

関連性理論から新 Grice 派への批判もみられる。

- (31) Peter : Where does Gérard love?
 Mary : Somewhere in the South of France.
 (32) a. Q + > Mary does not know where in the South of France Gérard lives.
 b. Mary is reluctant to say exactly where Gérard lives.

Sperber and Wilson (1995:273) は Mary が Gérard の居所を知って (31) のように答えた場合、新 Grice 派は (32a) の Q 推意を引き出しても (32b) の推意があることを説明できないという。しかし Q 推意や I 推意は (8) で示したように会話の協調原則や公理が守られていることを前提にしている。「うそ」や質の公理に違反している発話は対象外である。つまり無標の文脈の GCI では (31) の Mary の答えに対して聞き手の Peter は (32a) と推論する。もし Mary が居所を知りながら (31) のように答えたとき Peter が判断する有標の文脈では少なくとも 2 つの PCI が考えられる。1 つは Mary が冗談めかしてそう答えたときと判断する文脈で、そのときは皮肉や反語を解釈するときと同じく協調原則や公理を守っていると再解釈し、ほぼ (32b) のように推論するであろう。あと 1 つは確証はないが Mary が「うそ」を言っているのではないかと Peter が疑う PCI で、そのときは (32b) より厳しい推意（不信・軽蔑など）が生じるであろう。

G 発話の推論過程：（演繹法・アブダクション・帰納法の）複線型か（演繹法の）単線型か

日常の言語活動では D の (17) でみたように、無標の文脈で好まれる解釈やデフォルト解釈など、複線型の推論過程をとる GCI を仮定してはじめて説明がつく。これは日常の思考や

行動においても同様である。

- (33) トタン屋根がバタバタと音を立てており、太郎は雨にちがいないと思った。窓の外を見ると、次郎が棒で屋根をたたいていた。

(33) で太郎は最初バタバタという音を聞いて「雨にちがいない」とアブダクションに基づく推論をし、後でその推論がまちがっていることに気がつく。日常の言動が多様な推論過程をとるとすれば、それに見合う分析をする必要がある。これに対して関連性理論の扱う推論は B の (9) (10) でみたように単線型の演繹法に限られる。例えば B の (10a) の Mary の答えを聞いたとき Peter は (10b,c) およびそれに類似の次のような一連の文脈含意から演繹的に推論する。

- (34) a. A Rolls Royce is an expensive car.
b. A Cadillac is an expensive car.
c. Mary wouldn't drive a Rolls Royce.
d. Mary wouldn't drive a Cadillac.
e. People who refuse to drive expensive cars disapprove displays of wealth.
f. Mary disapproves of displays of wealth. (Sperber and Wilson 1986:197)

Mary の答えからの連想では (10b, c) とともに (34a-f) が文脈含意を構成する。しかし関連性理論が推意として認めるのは、関連性に基づく前提推意と結論推意の (10b, c) だけである。推意として選ばれない多様な文脈含意は発話で顕在化するわけでもない。多様な文脈含意が階層化されていないためデフォルト推意も示されない。

3 提言

3点を提言したい。まず第1は、文におけると同様に発話を対象とする分析においてもコードを設定することである。

- (35) a. * My grandmother wrote me a letter two days ago and six men can fit in the back of a Ford. (Lakoff 1971)
b. We've been wondering how many people can get into the back seat of a Ford and my grandmother decided to try the experiment. She tried it two days ago and *she wrote me a letter yesterday and six men can fit in the back seat of a Ford.* (Kempson 1975:58, 兎王 1998:81)

(36) a. * I hope the eighth of May.

b. When is she coming?— I hope she is coming the eighth of May. (Napoli 1996:300)

(35a) (36a) は発話の最初に用いられることがなく、通例不適格とみなされる。しかし (35b) (36b) の文脈では (35a) (36a) もそれぞれ適格である。だからといって、通例の文脈と例外的・周辺の文脈とは区別する必要がある。両者を同じレベルで容認することは無標構造を対象とするコードを否定することになる。

発話にコードが働いていないとすれば、つまり PCI のみで解釈されるならば、言語表現を律するものは発話でなく、文を対象とする文法だけとなる。これはことばによる伝達が齟齬なく行われている現実を説明できない。さらには発話の (不) 適格性や取り消し可能性、あるいは好まれる解釈やデフォルト推論の判断に多くの一致があることを説明できない。このような現象を説明するためには推論過程で働く多様な要素の階層や規則化を認める必要がある (F, G 参照)。

GCI を対象にコードをどのように設定するかが言語分析の課題である。その際、(35b) (36b) のような有標の文脈を無視するわけではない。このような文脈の考察は一般的用法と周辺の・臨時的用法を区別したあとで進められるべきものである。

第2の提言は言語現象を説明するために少数の原理に単純化する傾向に疑問を呈し、原則や規則のあり方を見直すことである。例えば発話の一貫性を説明するためには Blakemore (2001) は関連性という1つの原則でよいとする。逆に Sanders et al (1993) や Mann and Thompson (1988) は4つから23の原則を立てているが、それぞれの基準があいまいである。確かに原則の単純化や少数の要因への還元化は (26) でみた Zipf (1949) の「最小労力の原則」と合致し、「スマート」にみえる。しかし単純化した原則はあまりにも一般的・抽象的であり、具体的な発話の説明原理として役立たないことが多い。

このような状況は新 Grice 派にもみられる。かつて Levinson (1983) は前提と推意を語用論の主要なテーマとし、それぞれの章に約60ページをさいていた。しかし Levinson (2000:111) では推意を Q 推意と I 推意に発展させるなかで前提という用語を放棄している。Levinson 自身、前提を推意に還元すべきでない事実があることを承知しているが、両者の関係については明言を避けている。

E の (27) (28) では量 (quantity) を重視する Q 推意と情報量 (informativeness) を重視する I 推意 (または関係 (relation) を重視する R 推意) が拡大解釈されて適用されている。しかしここではそれと異なる認知過程が働いているともみられる。(27) では基本範疇 (my wife など) と周辺範疇 (a woman) の違いが関係し、(28) では現実世界のステレオタイプ (speaker's finger) が個別事例のモデルになり、ときに例外 (not speaker's finger) を許すことと関係しているようにみえる。それぞれの認知過程は基本範疇優先の原則と特質継

承の原則と呼ばれ、多様な言語表現に適用される（詳しくは児玉 2002b 参照）。Zipf の「最小労力の原則」が話し手と聞き手の側で一見相反する方向に働くように、人間の多様な視点の共通領域と固有領域の階層化をより明らかにする必要がある。原則や規則の見直しは科学の発展段階に伴う永続的な課題でもある。

第 3 の提言は意味の分析を中心とし、その対象を文から談話に拡大することである。今振り返ると、20 世紀は文を最大の単位とする統語論中心の時代であった。これまで言外の意味も考慮し、文を越えるものを扱う試みもあった。しかしその多くは 20 世紀の波の影響を受けて、新 Grice 派にしても関連性理論にしても、対象とするものはせいぜい 2 つの文の結合したものにすぎない。言語が形式と意味の結合したものであり、言語活動がまとまりをなす多数の文からなるとすれば、21 世紀の言語分析は意味を中心に、対象を談話全体やテキストにまで拡大すべきである。

文を最大の単位としてきた従来の統語論や意味論は談話やテキストの意味の生成理解を進めるうえでの基礎作業であり、最終目標ではない。対象を拡大し、談話全体をいかに分析するかという大きな課題がある。それ以外の意味分析にも未解決で未開発の問題が多く残っている。前提と推意の関係、一貫性、伝達に必要な情報量、デフォルト推論や橋渡し推論の範囲など、主として推論過程に関係するものである。ここでは簡単に情報量の問題だけを示す。

- (37) a. *?A house was built.
 b. *?The book is read.
 c. *?Napoleon was born.
- (38) a. A house was built *last year*.
 b. The book is read *by many*.
 c. Napoleon was born *in Corcica*.
- (39) * a built house vs a *recently* built house

(37a-c) が不自然であるのは A house, The book, Napoleon と主語を発したとき、既にその存在が前提になっているため、たとえ述部でその前提を断定しても伝達するだけの情報価値に欠けている。(38) のイタリック体部分は統語上随意的要素であるが、情報伝達上必須である（詳しくは Goldberg-Ackerman 2001、児玉 2002a:151 参照）。その結果、(39) のような(不)適格性の違いもでてくる。

従来、言語分析の対象はラングや言語知識であり、パロールや言語運用ではないとされてきた。この主張は統語論を中心に最大の単位として文を対象にする言語分析においてのみ成り立つ。多数の文からなる談話の意味分析では GCI を含む推論過程が中心となり、分析の対象はラングかパロールかという二者択一の問題ではなく、むしろ両者を統合したものになるう。

参考文献

- Bach, K. 1994. "Conversational Implicature." *Mind and Language* 9, 124-162.
- Berg, J. 2002. "Is Semantics Still Possible?" *Journal of Pragmatics* 34, 349-359.
- Blakemore, D. 2001. "Discourse and Relevance Theory." In D. Schiffrin et al (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, 100-118. Oxford:Blackwell.
- Carston, R. 1988. "Implicature, Explicature, and Truth-theoretic Semantics." In R. Kempson (ed.) *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*, 155-181. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carston, R. Forthcoming. "Relevance Theory and the Saying / Implicating Distinction." In L.Horn and G.Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. New York: Academic Press.
- Goldberg, A.E. and F.Ackerman. 2001. "The Pragmatics of Obligatory Adjuncts." *Language* 77, 798-814.
- Grice, H.P. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and L.I.Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3:Speech Act*, 41-58. New York: Academic Press.
- Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Hawley, P. 2002. "What is Said." *Journal of Pragmatics* 34, 969-991.
- Horn, L.R. 1984. "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature." In D. Schiffrin (ed.) *Meaning, Form, and Use in Context Linguistic Application*, 11-42. Wasington DC: Georgetown University Press.
- Kempson, R.N. 1975. *Presupposition and the Delimitation of Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論——ことばに埋め込まれているもの——』東京：くろしお出版.
- 児玉徳美. 2001. 「前提」小泉保（編）『入門語用論研究——理論と応用——』64-80. 東京：研究社.
- 児玉徳美. 2002a. 『意味論の対象と方法』東京：くろしお出版.
- 児玉徳美. 2002b. 「前提・推意の取り消し可能性について」『立命館言語文化研究』14:3, 89-103.
- Lakoff, R. 1971. "If's, And's, and But's about Conjunction." In C.J. Fillmore and D.T. Langendoen eds. *Studies in Linguistic Semantics*, 115-150. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S.C. 1987. "Minimalization and Conversational Inference." In J. Verschueren and M.Bertuccelli-Papi (eds.) *The Pragmatic Perspective*, 61-129. Amsterdam: John Benjamins.
- Levinson, S.C. 1988. "Generalized Conversational Implicature and the Semantics / Pragmatics Inference." Mimeo. Standford University.
- Levinson, S.C. 1995. "Three Levels of Meaning." In F. Palmer (ed.) *Grammar and Meaning*, 90-115. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S.C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Mann, W.C. and S. Thompson. 1988. "Rhetorical Structure Theory: Toward a Functional Theory of Text Organization." *Text* 8:3, 243-281.
- Napoli, D.J. 1996. *Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Recanati, F. 1989. "The Pragmatics of What is Said." *Mind and Language* 4, 295-329.

- Russell, B. 1905. "On Denoting." *Mind* 14, 479-493. Also in Zabeech et al. 1974. 141-158.
- Sanders, T., W. Spooren, and L. Noordman. 1993. "Toward a Taxonomy of Coherence Relations." *Discourse Processes* 15.1:1-36.
- Sequeiros, X.R. 2002. "Interlingual Pragmatic Enrichment in Translation." *Journal of Pragmatics* 34, 1069-1089.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986, 1995(2nd ed). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Strawson, P.F. 1950. "On Referring." *Mind* 59, 320-344. Also in Zabeech et al. 1974. 320-344.
- 武内道子. 2002. 「言語形式の明示性と表意」『英語青年』146 卷 4 号 240-241.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1986. "An Outline of Relevance Theory." *Encontro de Linguistas* (University of Minho). Also in T. Konish and K.Sugayama eds. 1992. *Current Approach to English Linguistics*, 120-150. 東京: 英宝社.
- 山本英一. 2002. 『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』大阪: 関西大学出版部.
- Zabeech, F., E.D. Klenke, and A. Jacobson (eds.) 1974. *Readings in Semantics*. Urbana: University of Illinois Press.
- Zipf, G.K. 1949. *Human Behavior and the Principle of Least Effort: An Introduction to Human Ecology*. New York: Hafner.